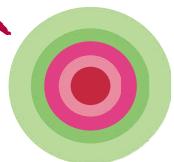


!!! 今月の SpotLIGHT

嘉手納基地で働く様々な職種の日本人従業員にスポットをあてて毎月紹介して行くコーナーです。今月はこの方です。

(写真上下: 米空軍・金城順子撮影)



第18航空団施設群施設中隊消防隊

かかず ひろひと
賀數 裕仁さん

Q1. あなたの職種と仕事の内容をお聞かせ下さい。

嘉手納基地消防隊でトレーニングアシスタントをしています。日本人 軍人の全隊員を対象に（米国国防総省のガイドラインのもと）消防士としてるべき各資格取得のための調整、助言をし、さらに適宜資格更新がなされているかその管理も担当しています。その他、航空機火災、建物火災などの様々な状況における消火訓練、あるいは交通事故における救助医療訓練にも関わっています。嘉手納基地消防隊は地元の消防署と合同消火訓練を実施していますが、最近の硫化水素事件を受け、地元の関係機関に講習を行ったことは記憶に新しいところです。

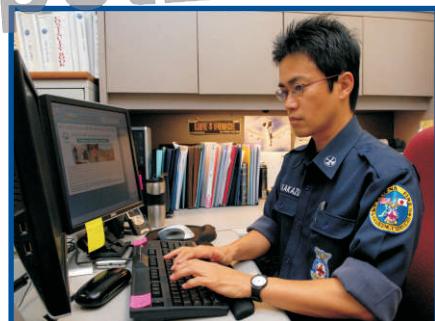


Q2. 消防隊に勤めてどのくらいですか？

21年間です。今年の3月まで消防士として現場にありました。訓練課に異動してからの勤務時間は、月曜から金曜の午前7時から午後6時まで。消防隊には現在、日本人従業員約50名が勤いています。

Q3. 今の仕事はやりがいは、どこにありますか？

以前はシフト制の部署で、仕事内容は限定的でしたが、現在は消防業務全体の仕事に関わり貢献できることです。



HIROHITO KAKAZU

Q4. この仕事の一番の課題は何ですか？

軍人には、資格取得の期限がありますので、それに間に合うよう指導することです。日本人隊員に対して必要があれば、専門用語のアドバイスをしたりすることもあります。日本人とアメリカ人では習熟度が違うこともありますので、それを埋め合わせる補講なども大切です。

Q5. アメリカ人と働く環境の中で、彼らの印象は？

1年間を通じ毎月時間割を組み、日本人とアメリカ人に對し消防活動に関する講習を同じクラスで行いますが、日本人は生徒と先生としてある程度の距離感を置きますが、アメリカ人は友達のように接する傾向にあります。このように個人間の対人距離が違います。またアメリカ人には、個人的に考え方行動するという自主性が顕著です。いろいろな文化 習慣の違いを感じるときがありますが、御互いの良い面を融合して職務を遂行するようにしています。

Q6. 同じ様な職種に就こうと考えている日本人へのアドバイスは？

採用条件としては、高卒以上で大型車両免許を持っていること、また英検3級以上が求められます。そして何より重要なことは、協調性と自主性があることです。消防隊はスポーツのチームのようなものなので、英語能力がどんなに優れてもチームワークがなければ十分に機能することはできません。その上で自ら考え方行動できる人が最適です。

アメリカ人ダイバー、沖縄の海保護活動に参加

第18航空団広報局
ネスター・クルーズ二等軍曹

嘉手納基地マリーナの職員が、沖縄の海の生物を保護する活動に取り組んでいる。

第18兵力支援中隊に所属するカデナ・マリーナの職員は、国際サンゴ礁年の促進と地元地域への積極的な貢献のため、今年1月19日に「ちゅら海コーラル・プロジェクト」を立ち上げた。

同中隊のアウトドア・レクリエーション特別企画責任者の金城綾子さんは「国際サンゴ礁年をテーマにマリーナの職員とどういった活動ができるか話し合いました」と話し、「養殖珊瑚の移植放流を手がけるシー・シードと連携してマリーナの近海から珊瑚の損傷が確認された海域へ新たに珊瑚を移植する活動を支援することになりました」と説明する。

このプロジェクトは、これからの世代のためにきれいな海を残すことを目的とし、多くのアメリカ人ダイバーらが率先して協力している。

マリーナに勤めるダイビング・インストラクターのチャールズ・グラス氏は「マリーナを利用する方がこのプロジェクトに賛同し、時間と資金を寄せててくれています」と話し、さらに「環境のために行動を起こす良い機会。私たちダイバーにとって、珊瑚礁を失うのは忍びないことですし、そうなると私たちだけでなく子どもたちのダイビングをする機会を減らすことに繋がりかねないからですからね」と語った。米軍に所属する隊員や家族は、誰でもこのサンゴ礁保護プログラムに参加できる。各レベルの有資格ダイバー、シュノーケラー、またダイバーの資格を持っていない人でもこの環境保護活動に参加がすることが可能である。

グラス氏は「小学生や十代の若いダイバー達も私たちと一緒に珊瑚移植活動を行っています」と説明し、さらに「活動を支援するのにダイバーの資格を必ずし持っていないなくてもいいのです。ダイバーではない方々は、シー・シードから珊瑚を購入して頂ければ私達のダイバーが移植を行います」と話した。

珊瑚の移植は、二度のダイビングで行う。一回の潜水にかかる時間がおよそ40分から一時間。一度目の潜水で移植に適した場所を選定する。二度目の潜水で、珊瑚は指定された場所に移植され、金属性のケージで保護される。金城さんは、「実際は活動を支援するダイバーは、一度の潜水で移植作業を完了する技量があります。しかしながら二度に分けて移植を行うのが理想ですし、作業を急ぐ必要はありません」と話す。

金城さんによると、珊瑚の移植作業は主に北谷町の近海で実施されている。

「シー・シードは慎重に環境を調査し、その海域

(写真提供：ちゅら海コーラル・プロジェクト)



珊瑚の移植に適した場所を探す嘉手納基地ボランティア



珊瑚の成長を保護するために金属性のケージを設置する嘉手納基地従業員

の在来種の情報に基づいて移植する珊瑚を決定します」「シー・シードの目標は糸満市そして読谷村まで活動範囲を広げることです。」

活動に参加するには、珊瑚購入代として35ドルそしてダイビング代15ドルを支払う必要がある。これは決して利益を得るものではない。

グラス氏は、「珊瑚の購入代金はシー・シードへ渡され、ダイビング代は燃料代金として船長へ渡されます」と述べた。「私たちは利益を得るために活動をしているのではありません。これは私たちの海をきれいにするまたとない機会なのです。」潜水は公認のベテランダイバーが他のダイバー達を伴い、一般的に行われるボートダイブ(船からのダイビング)を指示する。移植に必要な装備品は全てカデナ・マリーナから提供されている。プロジェクトの成功の鍵となるのは、マリーナの職員、シー・シードのスタッフ、そしてアメリカ人ボランティアの協力であると言える。

「サンゴ礁を次の世代へ。それがシー・シードのスローガンなんです」と金城さん。「その目標に向かって、全員が一致団結し活動に取り組んでいます。」

戦後を振り返る：長年基地で勤めた従業員が米国の沖縄復興支援について語る

第18航空団広報局
レイ・ラモン等軍曹

2008年8月13日 嘉手納基地 – 8月15日は第二次世界大戦終結に伴い日本とアメリカが互いへの敵対行為を停止した63回目の記念となる日である。「シュウセンキネンビ」(終戦記念日)は、日本の歴史における重要な節目であり、それは日米の新たな関係が始まった日でもある。

停戦宣言と続く平和条約締結後、アメリカ兵らは沖縄の人々と共に、壊滅状態にあった島のインフラ復興と生活環境の再建という困難な作業に取り組むことになった。現在嘉手納基地に勤めるほとんどの空軍兵が生まれる前から基地と関わってきたある地元の男性にとって、復興作業は地元の再生と同時にアメリカ軍と共に働くという特有の機会になつた。その経験は彼にアメリカ軍に対して、またその何年にもわたる沖縄駐留について独自の見解をもたらすこととなる。



(米空軍：レイ・ラモン等軍曹撮影)

島袋栄一郎さんは嘉手納基地にある医療群に従事した初めての沖縄出身の従業員である。1950年6月に採用され、放射線課で働き、（当時）毎月三千円相当額を給与として受け取っていた。一年後、彼は研究課へ異動となり様々な医療器具の扱いについて訓練を受けた。

基地で働き始めて彼自身の生活環境が安定し始めた中、島袋さんは戦争の影響で殺伐とし基本的な生活基盤の欠けたままだった沖縄について振り替えた。

「戦争が終わったあと、污水処理施設はなかったし、水道設備はあろか水もない、そして様々な疾病が発生したがそれを治す薬もなかったことを覚えているよ」と島袋さんは話した。「当時沖縄にはいい病院はなかったからアメリカの病院に頼っていたんだ。1950年までは、マラリヤや結核などいろいろな病気にかかった地元の人を治すのにアメリカ人から薬をもらっていたんだよ」

島袋さん自身も本島南部で広まったマラリアにかかった。

島袋さんは「アメリカ人が僕のマラリアを治すために黄色のタブレットをくれたんだ」と話した。島袋さんによると、地元の病院では治療できない患者たちは、救急車両で基地内へ搬送したという。患者は近隣のみならず琉球列島の各地から搬送されてきた。

島袋さんは日中の勤務をこなし、勤務外の時間でも地元の患者が搬送されてきた時に応する緊急スタッフとして業務を行っていた。

島袋さんは「（時には）24時間働くこともあったよ」と話し、「電話をとると“緊急患者”と言われたんだ。もし僕が行かなければ患者の治療ができなかつた。なぜなら病院にいた地元スタッフは僕だけだったんだから」と話した。

1964年8月、嘉手納基地クリニックは献血業務を開始し、その血液は地元の中部病院に提供されることもしばしばあった。島袋さんは、それ以前は地元の病院で患者へ輸血は行われていなかつた、と話した。

島袋さんは「1964年までは何もなかつたから、沖縄の人たちはいつもアメリカ人を頼っていたよ」と話し、「それ以後はだんだんとよくなつていつたけれどね」と話した。
再建への道のりは長く、アメリカ人と地元の人々の多大な協力関係の下、進められた。

アメリカ政府が軍事基地と住宅を建設すると、同時に島の水道施設も整備された。それ以前は井戸水が主な水源であった。

島袋さんは、「アメリカ人の支援で那覇とつなぐ水管の工事が1950年に始まつた」と話し、「その後1959年に浄水場が石川で建設されたがそのときもアメリカ人が支援してくれたんだ」と話した。

戦後何年もたつてから、アメリカ軍の多大な協力により沖縄は教育システム、衛生事業、公共事業などを開始した。

島袋さんは1996年に定年を迎えたが、ボランティアスタッフとして2000年にクリニックの現場に帰ってきた。現在は77歳だが、ボランティアとしてインフォメーションデスクで週に2時間勤務する。彼の戦後のアメリカと沖縄の人々との関係に対する考え方と、58年にも及ぶ在沖米軍への貢献は、尊敬され、一目置かれている。

沖縄が終戦の日を迎えるにあたり、島袋さんは、戦後移り変わる沖縄と復興を可能としたアメリカ人と沖縄の人々の密接な協力関係についてこう振り返る。

アメリカ人の支援がなかつたら、沖縄の人はどうにもできなかつた、と島袋さんは話す。「私たちは地元の再生に協力してくれたアメリカ軍に対し感謝の気持ちをもたなければいけない。」

地域住民の基地内参拝支援する第18航空団

第18航空団広報局
クリストファー・マラスキーニ二等軍曹

地元の方々が嘉手納基地内にある親族のお墓に参拝する際、基地内の隊員はその参拝の様子を直に見て、拝所の歴史的背景や保護の大切さについて学びます。嘉手納基地の第18航空団は太平洋地域における平和を促進するという任務を遂行すると共に、次の世代のために過去の歴史を保存するという取り組みを続けています。

第18航空団は地元の方々が嘉手納基地内にある墓や拝所をお参りできるよう公的プログラムを作り、それら拝所、周辺の美化 保護管理を航空団付属の部隊が受け持っています。



(米空軍：ジョッシュア・ガルシア二等軍曹撮影)

2001年9月1日の同時多発テロ以降、基地内により厳しい警備態勢が求められ、それまで行なわれていた簡素な一般の立ち入りが制限されました。結果、地元の万々の拝所参拝が難しくなってしまったという経緯があります。

「9・11以降に基地内の警備態勢が強化されたため、広報局として地元のために何かしなければと思案しました」と語るのは第18航空団広報局渉外部長の普久原尚子渉外官。「新たな警備態勢の中でその要求を満たしつつ、地元の方々の拝所訪問を引き続き可能にする方策はないかということで、たどりついたのが、各部隊の隊員が訪問者を拝所にエスコート（案内）するというプログラム作りでした。」

参拝希望者をゲートから参拝する場所へ案内するという参拝プログラムは、嘉手納基地内のボランティア隊員を中心しています。参拝日は通常金曜日に設定されており、一日3グループの訪問希望を受け付けます。訪問当日は、米軍関係者が訪問者とゲートで会い、基地内へエスコートします。また、旧暦による特別な参拝日や行事がある場合（例えば旧暦9月9日など）の際は、曜日に関わらず第18航空団広報局渉外部職員が案内役を引き受け拝所訪問が可能になるよう対応します。

春には「シーミー」とよばれる沖縄の伝統的な清明祭があります。昨年は約70家族330名の地元の方々が嘉手納弾薬庫地域内にある先祖代々のお墓に訪れ儀式的な拝みを行い、家族の健康や繁栄を祈願しました。第18弾薬中隊では、毎年春に、同中隊の隊員や職員が訪問者を嘉手納弾薬庫内にある墓地へ沖縄の方々を案内しています。同中隊で勤務する伊波真勇さんは地元沖縄の出身で、その参拝手続きのため地元側と基地側の連絡調整を担当しています。伊波さんは「地元の皆さんのためにお役に立てれば嬉しいです。」と話しました。このようなプログラムは嘉手納基地内にいる米国人にとっても日本や沖縄の人々の文化について学ぶ機会となっています。

参拝プログラムを担当する広報局渉外部の島袋香織渉外官は、「ボランティアの中には地元の参拝者と意気投合し絆を深める人もいます」と話しました。「参拝後に地元の方々の中には持ってきたお弁当や重箱を広げ昼食を取られる人もいます。その際、案内をしているボランティアも昼食に誘われることも多々あり、一緒にお弁当を食べながら地元の方々とお互いのことを知るきっかけを作ることができます。」さらに「ボランティアからのたくさんの好意的な意見が寄せられています。」と参加者の声を伝えてくれました。

弾薬庫地域でのシーミー行事に加え、昨年嘉手納基地内にある拝所へ訪れた人々は161名に上ります。

1993年に嘉手納基地で行なわれた調査で、92の文化財が確認されました。それらの文化財の中には、旧日本軍の格納庫や、古い墓、さらに降伏調印式が行なわれた場所も含まれます。嘉手納基地はこれらの遺跡を次世代に残すため、基地の財源を使って歴史的な文化財に記念碑を建てたり清掃したりと、訪問しやすい環境を作っています。

参拝プログラムとは別に、嘉手納基地では部隊がそれらの文化財や建造物の清掃や管理をする「アダプト アサイト」と称される部隊の文化財管理プログラムも実施しています。このプログラムに関心のある部隊は、歴史的文化財のある場所を一ヶ所引き受け、年間を通して清掃や周辺木々の伐採など、維持管理を任せられます。特に台風の後は、木々やごみ等が散乱するため責任もって清掃作業をする部隊の存在は大切です。

文化財管理プログラムは維持管理のためだけではなく、嘉手納基地内の隊員に基地の歴史保存の大切さを学ぶ機会を作る、と話すのは、第18航空団の文化財保護官を務める小嶺ジョージさん。「米軍人にとってもこれは教育的プログラムだと思います。いかにこの場所が重要な歴史ある場所なのかということを米軍人に理解してもらう事が大切で、基地内にある各文化財を保護 保存しているという意識の向上に繋がります。」

小嶺さんはさらに、これらの文化財を保護するのは第18航空団の責任であり、それを嘉手納基地に所属する米国人に示す事によって沖縄の歴史を敬う大切さを教えてくれると強調し、「これらのプログラムは、嘉手納基地内の住民が沖縄の文化財を重要なものとして捉えているという証拠だと思います。」と話しました。